

音楽的知覚に関する研究 (VI)

——色聴所有者の人となりと反応の分析——

古 矢 千 雪

Studies in Musical Perception (VI)

——Analysis of Response and Character of Color Hearer——

Chiyuki FURUYA

音楽刺激に対する共感覚的反応の有無を調べる中で、前回の報告で述べたが、色聴らしい反応を示す被験者を発見した¹⁾。今回はその中から2人の被験者について、色聴反応の現われ方、ならびに各人の生育史や人格特性などを検討し、色聴反応を示すものとしての人となりを把握することを試みる。

M. クリッチュリー (1977) は色聴に関する過去の研究を紹介しているが、その中から今回に関連のある事柄をまとめると、次のようにいえよう²⁾。

色聴は生まれつきの能力（または感覚）として存在するか、あるいは一連の心的連合（または条件づけ）によるものと考えられる。

反応を生起させる刺激が、楽器の音であろうと人の声や物音であろうと、個々の音に対してそれぞれ色聴反応を示す人もあれば、個々の音ではなく、音楽の形をとった場合に色聴反応を示すものもある。

色聴の現われ方というか、被験者にとってのその主観的経験は、視覚的イメージと幻覚との中間に位置するであろう。

色聴反応を示す人の特性として、内省的で知的な人、芸術的で感性の鋭いあるいは美的な性格のもち主、色と自然を好み・生得的教養があり・読書能力や芸術的才能がある人、などがあげられている。

これらの点をふまえ、今回の被験者であるイニシャル T. Y. の場合を Case A, T. M. を Case B とし、さらに参考例として雪石 (1973, 1976, 1978) の被験者である T. K. の場合を Case C として整理し、それぞれ色聴の現われ方や各人の人となり等について検討することを試みる^{3) 4) 5)}。

方 法

1. 被験者

Case A: T. Y. 26才 女子短大生

Case B: T. M. 20才 女子短大生

(Case C: T. K. 56才 男性・小学校教員)

2. 色聴実験の音楽刺激

レスピーギ：ローマの松（はじめの部分）

喜 多 郎：シルクロード

ラ ベ ル：水の戯れ

バ ッ ハ：プレリュード

ブローフェ：グランド・キャニオン組曲・III

単音の刺激として、モンテソーリ感覚教具のベル音楽はテープに録音されたものを、ステレオ・テープレコーダーで再生した。音量は被験者の好みに合わせて調整した。

3. 生育史

各々個人面接を実施し、特に乳・幼児期から児童期にかけての情緒的体験に注意しながら記録した。

4. 性格検査

雪石 (1976) の報告にもあるように、認知のテストであるロールシャッハ・テストを用い、片口法によりスイス原版で行った。さらに MMPI と Y-G 検査を実施した。

5. 色聴実験・面接・性格検査ともに、筆者の研究室において実施された。被験者は日頃研究室に出入りしており、いずれもリラックスした状態で行なわれたものと思われる。

色聴実験は、自由な姿勢で目を閉じた状態で行ない、音楽が終了した後、内省報告を求めた。

結果と考察

1. 色聴の内容

Case A: T. Y.

ローマの松：前回の実験では、きこえてくる音により、色が黒っぽく・黄色っぽく・赤色っぽく変化すると報告したが、今回の実験では、何も見えないと答えた。

シルク・ロードより被験者の好みの3曲：曲の流れはじめは連想であるが、春、花の中で子供が走っている。……今度は海、次第に夕方になっていく。ここから実際に見えてきたが、目の前が青くなってきた。まるで、プラネタリウムの中の夜空のような深い青色。その中を白っぽい物が動いているが、……よく見るとそれが動物に見える。猫や犬が走っている。

次の曲は物は見えない。黄色っぽい色、色だけが見える。

今度の曲は、はじめ現実の気にかかることを考えていたが……さみしそうな人のうしろ姿が見える。全身ではなく、頭から背中位までが、下の方は見えない。すーっと動いて向うに行った。目の前がパッと明るくなった。これで終りという感じに明るくなった。

水の戯れ、プレリュード：何も見えない。

グランド・キャニオン組曲のIII：曲のはじめ頃、2本の溝というか砂が、砂時計の砂のようにサラサラ、サラサラ流れていくというか、あちてゆく。……なぜか、やかんのような形があらわれた。

単音の刺激：何も見えない。

Case B: T. M.

ローマの松：管楽器の音をきくと、光が走るように見えるし、金色や銀色が目の前でチラチラ、あるいはキラキラする（前回）。今回は見えなかった。

他の音刺激では何も見えない。

Case C: T. K. (参考例)

プレリュード：夜が明けてきた、静かな湖、深く・ぶくっと、こう水の泡がきて……水面にきて……、パッと音がして、音をたてて消えてゆく。それが何回も何回もくり返されてゆく。水はすき透るように青い。霧がすーっとたちこめて……はらう。（以下省略）

グランド・キャニオン組曲のIII：最初いやな茶色だ……外国の殺風景な、こうレンガ建ての街並、少し賑やかになってきたな、……何か物語があるネ、これにはネ……パカパカ、パカパカと馬車が歩いているような感じ、栗毛の二頭だての馬車……ふうん、ロバだ

なこれは……うんと貧しいような恰好をして、誰かが歩いてきたな。（以下省略）

単音の刺激（純音 1000Hz）：イカの腑のセピア色を瞬間的に感じた。（1カ月後に同じ刺激を呈示した時は、何も見えない、灰色だと答えている。）

色聴反応が個々の音に対して生起するものと、音楽の形をとった場合に生起するものがあるという点については、Case AとBは、音楽の形をとった場合に反応が生起するものといえよう。Case Cは、個々の音にも色聴が生じると報告されている。しかし、Case A・B・Cいずれの場合も、同一音楽（音）刺激に対し、色聴の生じる時と生じない時があった。このことは、色聴の生起に、被験者の主体的要因が影響力をもっていることを示している。

そこで、色聴がどのような時生起するか、それぞれの被験者の報告をまとめると次のようになる。

2. 色聴の現われ方

Case A: T. Y.

精神的におちついていて、音楽の中に入っていくことができる、目の前に色や情景が見えてくる。視覚的イメージもよく連想するが、実際に見えることとは区別できる。

音楽をきいて、単に楽しむことが普通であるが、時に音楽の中にとけこんでいくと、自分の存在感がなくなるような感じになる。そのような時、見える。体はどちらかというときむくなる。

記憶にあるのは、18～19才頃、よく見えていたように思う。最近あまり音楽をきかなくなり、きいても耳を通りすぎるだけで、イメージにも結びつかないことが多い。

音楽をきいて何かが見えるということが、普通ではないことを知らなかった。自分にはあたりまえに思っていた。

Case B: T. M.

今までに音楽をきいている時、色か何かが同時に見えるていたか、ときかれるとはっきりしない。特別の記憶はない。視覚的イメージの連想はよくある。しかし実験の時、目を閉じて音楽に没頭した時、管楽器の音がキラキラ見えた。管楽器の音だけが、金色や銀色に見えた。

音の場合だと、夜、消防車のサイレンの音をきくと、目の前がパッと赤くなる。昼間は意識しないが、夜暗

い中できくと、赤い光が見えるというか、目の前全部が赤くなる。これは現在も続いている。

Case C: T.K. (参考例)

音が自分の体の中に入ったと感じたとき、色聴が起こる。音が自分から離れて外にあると感じるときは、何も見えないし、何も起こらない。目をあけていると、いろいろな刺激が目に入るので、音が外にある感じがするが、目をつむると音が自分の中に入ってくる。

色聴生起の間は、音そのものになりきっている。

色聴の生起しているときの気分は快である。体がポツと熱くなってくると見えてくる。

中学生の頃からすでに色聴はあった。指摘されるまで、誰でも音と一緒に色を感じるものだと考えていた。自分にとって、色聴生起時の音と色とは、分けられないものだ。

このごろ、色聴があまり起きなくなった。ふと色聴の起きているのに気づくとき、これは普通には起きないことなんだと思うと、だんだん消えていってしまう。

色聴現象とは、音刺激に対する2次感覚として、音刺激が音として認知されると同時に、色彩として、時には形や動きを伴ったものとして認知されることをいう。しかし、単に感覚の領域だけで処理できる現象ではなく、認知する側の主体的要因(例えば、精神的な状態)が、かなりの作用をする現象であるといえよう。このことは、Case A, Cの被験者の色聴の現われ方をみれば、うなずける。さらに次に述べる例もこの点を明らかに示している。

内藤(1936)は自分自身の色聴現象を分析する中で次のような報告をしている⁶⁾。

フォティズムをよく観察しようと思えば、音に耳を傾けつつ、その現われ方を視覚的に把握しようとする努力が必要である。音と合一して無我直観の状態に入るのではなく、あくまでその現われ方を客観的に見極めようとする態度が必要である。さらに、色聴を見る場合の心構えにより、例えば、演奏を漫然ときいている場合と、パステル画に描こうとその見えているものをよく観察するときとでは、見え方が変わってくる。また、その見え方は、一次的視覚とは異なり、前方はもちろん、上下左右後方まで見ているのである。

この内藤氏の場合と今回の被験者とは、色聴の能力に差があるのか、色聴の質が異なるのか、音楽刺激の存在のみで即色彩が見えるのではなく、音と一体となったような心の状態が必要であることを、Case A,

B, Cの3者ともに指摘している。

そして、見え方は、目を閉じているので何も見えないはずなのに色や形が見えているわけで、まるで、心の中で見ているような感じという表現をしている。

現われる色彩は、実際目で物を見る場合と同様の表面色を見ることもあれば、空間色の場合もある。立体感や遠近感は普通の視覚と同様にあるようだ。

現われる色彩はどこに見えているか、Case A・Bの被験者に問うと、顔の前方であると報告した。内藤氏のように後方も見えるというものではなかった。

色聴が生まれつきの能力であるか否か断定はできないが、Case Aの被験者は、音楽をきくと色がみえるものと思っていた点から推測し、生まれつきもっていた能力とも考えられる。が、被験者の記憶に残らない、幼少時の情緒体験による学習された反応、という考え方も同時にできるわけである。これに対し、Case Bの被験者は、特定の音刺激に対して、特定の色聴反応を示すことから、学習された反応であると考えられる。

一般に色聴の生起は、子どもの頃の方が容易であり、年令が高くなるとなくなるといわれているが、Case A, B, Cはそれが現在まで継続しているのである。色聴を生まれつき持っていようと、学習したのでであろうと、成人した現在も色聴反応を有するものとはどのような人物か、色聴反応が学習されたものであれば、いつ学習されたか、検討が必要となる。

3. 生育史

Case A:

彼女が生まれた時、父・母・4才の姉がいた。小さい時、赤んぼの時の事はわからない。

3才頃、父母が離婚し、彼女は父母と別居することになり、父方の祖父と姉と3人で小学校2年生頃まで暮らす。その間、4才頃父は再婚、6才頃妹が生まれている。3年生の頃、父・継母・父方の祖父・母方の祖母・姉・本人・妹とはじめて同居の生活が始まる。

高校卒業後 看護学校入学。卒業後病院に勤務。この間に友人2人の自殺に遭遇する。彼女は人の死を感じる事が出来たといっている。

25才の時大学進学、26才で在学のまま結婚する。

父・継母ともに教員である。転校数回、山間部に多く住む。

小学生から中学生にかけ、図書館の本を読み尽す気持ちで、よく読んでいた。少年少女文学全集などというような、いわばお話の本を読んだ。かといって、と

じ込めるのではなく、自分としては、男の子に混ってよく遊んでいたと思う。本を読んでいると、話の中に自分が入りこんでいく感じは、よくあった。今でも好きな本を読むと、目の前に情景や姿が見えてくる。

小学生の時レコード鑑賞の時間があり、よくレコードをきいていた。記憶によれば、音楽をきいていて、イメージがよくわいていたのは18~19才頃だと思う。看護学校でレコード鑑賞の時間もあったが、自分でもよくレコードをきいていた。さみしい、暗いイメージがよくわいていた。イメージだけの時もあるが、見えている場合もある。音楽が好きだから、演奏が出来ればよいと、ピアノ・エレクトーン・ギターを試みたが独学に近いめか、上達しなかった。短大に入学した頃からあまり音楽をきかなくなった。最近は音楽をきいても耳を通りすぎるだけである。精神的におちついていないからかもしれない。唄うのが好きで、今は演歌にこっている。

Case B:

長女として生まれ、5才の時弟が生まれる。

幼稚園の頃、夜、同じアパートから出火。父親がドアをあけたらすでに炎で赤かった。家族と外に出て、その火事を見ていた。自宅は天井がこげた位であったが、消防車のサイレンは耳に残っている。強く印象に残っている。

小学校2年の時転宅、現在地に移る。その頃、両親は共働きであったので、昼ごろ家で腕を骨折した時もそのまま母親の帰りを待っていた。親のいない不安、さみしさは今も覚えている。

幼稚園の時オルガン、小学校の5~6年の時ピアノを習った。同時にブラスバンドに入り、トランペットや打楽器を習った。高校の1年終り頃からまたブラスバンドに入り、フルートを習った。音が好きだ。3年の時、受験のためまたピアノを習う。ブラスバンドを指導される先生は宗教音楽の好きな人であったが、ポピュラーからマーチまで、いろいろ演奏した。

音楽鑑賞はあまりしなかった。中学校の音楽の時間では、試験に結びつくので嫌いだった。高校の時は、きくより演奏する方が好きだった。現在主にきくのは外国のポピュラーである。

本は小・中学校から現在まで、好きでよく読んでいる。小さい頃、母親の帰りを待つ間、本を読んでいた。多分、普通以上に読んでいたと思う。好きな本は何回もくり返し読む。くり返し読む本の主人公が、夜などそばにいるような気がする。昔話・童話的なもの、

ファンタジックなものが昔から好きで、今でもそのような本を読んでいると、心が安まる。現実を忘れることができる。

絵は、童話や昔話の本のさし絵が好きで、中学の時クラブに入っていた。谷内六郎の絵が好きだ。しかし絵を描くより、今は詩を書く方が好きだ。

Case C: (参考例)

父母・9人の同胞の長男として生まれる。父母ともに教員である。12才の時、4才の妹を病死で失っている。

師範学校に入学し、親元を離れる。国文学をよくし、演劇部で活躍した。卒業後、小学校教員になる。勤務地は、結婚後も含め数回以上変っているが、山あいの小さい村に好んで勤務している。

Case B の、消防車のサイレンの音に対する赤い光、管楽器の音に対する金色と銀色という色聴反応は、前回の報告でも述べたが、それぞれ過去の強い体験に起因するものといえる。これに対し、Case A は、このような両者の結びつきを示す直接経験は、彼女の記憶の中に見い出せなかった。

では、Case A, B に共通する彼女らの人となりを形成した幼い頃の情緒体験は、何であろうか。

Case C の子どもの頃の記述は乏しいが、後で述べるロールシャッハ・テスト反応の中に、彼の来し方の体験あるいは生活感情が現われていると、雫石(1978)は記述している。つまり彼は、人間社会にいるより、自然の中に安らぎを求め、人間関係に彼に好ましいのは、無邪気で素朴な子どもや彼の欲求を満たしてくれるメルヘン世界のおじいさんおばあさんなのである。

このような、現実社会から離れた、自己を没入できる別の世界を現在も持つという傾向は、Case A・B にもみられる。彼女らは小学生の頃から、人よりも(多分)多くの本を読み、しかもその物語の中にとけ込むような体験をもち、今なお本を読むと現実を忘れ、物語の世界に入りこめる、そして心の安らぎを覚えるのである。

幼い頃の情緒体験の世界、現実から離れ心の安らぎを見い出すような内的世界をそのまま現在も失わずにいる点は、Case A・B・C の3者とも同じである。

雫石も T.K. の人となりとして指摘している、この幼い頃に形成された感受性の強さ、豊かな想像力が、現在も色聴反応をもつものに共通する、人となりといえるであろう。

4. 性格検査

1) ロールシャッハ・テスト

Case A:

このテストを受けるのは初めてであるが、昨年集団テストを受けており、通常のインストにより 10 枚のカード全てに反応が生じた。

Total 反応数=46, 平均 R. T.=1'32", 平均 R_I. T.=6.1" であった。反応領域は W, D, d, S の全てにわたっていた。反応決定因は運動・色彩・形態・陰影などさまざまであり、その説明は、「なぜそう見えるかときかれても……パッと見るとそう見えるから……」と主観的であることが多いが、筆者が十分理解しない顔をすると、説明を補足した。

T. Y. の自由反応段階の反応と、吟味段階での説明を整理し、次に記す。

カード I

- 6" △ ぱっと見るとが、全体としてみた感じ。チョウじゃない。きれいじゃないから。(W, F)
- △ 少女がドレスを着て踊っている。2 人向いあって、……頭・手・ドレス……動いている (D, M)
- △ 熊がいる。2 頭。座って手を出している。顔, 手。(D, FM)

1'50"

カード II

- 4" △ 2 人のおばあさんが何かしている。赤い所が顔, 2 人が手を合わせて、しゃがんでいて、くずれた感じの黒い服。タボタボして、太っているからおばあさん。(W, M)
- △ 人工衛星。中の空白の所の形。シューと飛んでいる。赤い光を出して。(DS, F)
- △ かに。赤い色がかにに見える。(D, CF)
- △ かに。かには赤い。(D, CF)
- △ 胃。黒い所の形が似ている、中にある赤い所が病変にみえるから、よけいに胃。

(D, FC)

1'38"

カード III

- 2" △ 人が踊っている。頭, 手, 足, ぼうしをもっている。(W, M)
- △ 腎臓。普通の腎臓と向きが違うので病気。(D, F)
- △ 火の玉。赤い所, 飛んでいる感じ。(D, CF)
- ▽ 怪獣。目があって、手があって。(D, F)

△ 骨盤。見た感じ。(D, F)

△ 甲状腺。これも見た感じ。(D, F)

1'20"

カード IV

- 3" △ くつ。形から、長ぐつをはいたねこの長ぐつ。(D, F)
- ▽ 背椎。真中のところの形。濃淡の具合、形がそうになっている。(D, F)
- ▽ 骨盤。全体としてみた感じ。(W, F)
- △ へびかな。頭があって、夢の中でみる嫌いなへび。へびがぶらさがっている。(d, F)

1'15"

カード V

- 5" △ チョウかがかな。全体としてみて、足, 触角, チョウはきれいだからこれはがかな。(W, F)
- △ 馬。頭, 足, おとぎ話に出てくる。走っている。(d, FM)
- △ 暗やみ。馬のうしろの黒。暗やみから馬が走り出ている。(D, K)
- ▽ 鳥がはばたいている。鳥の頭, 2 羽いる。(W, FM)
- △ 妖精がいる。頭, 向いあった顔, フワフワした服。(d, F)

1'45"

カード VI

- 5" △ おしり。ジの手術を見たから、感じとしてこんな。(D, F)
- △ ねこ, シャムネコ。見た感じと、ヒゲ, フワフワした感じ、濃淡による感じ。(D, Fc)
- △ アルプスにいる犬。ムクムクした。足, 犬の頭, フワフワしたやわらかい感じ。(D, Fc)
- ▽ あじのひらき。形がそう。(D, F)
- △ カメレオン。目と口と、向いあっている。(d, F)

1'24"

カード VII

- 5" △ ライオン。ライオンの顔, 手, 胴。(D, F)
- △ 人が 2 人いる。胸から上。ポニーテールをした頭, 顔, 胴。(D, F)
- ▽ 人が 2 人立って踊っている。カーリーヘヤー, ヒップ。(D, M)

1'34"

カード VIII

- 8" △ いたち。これが手, 足, 頭。(D, F)
- △ きつねが遠ぼえしている。そう見える。月を見てぼえている。(D, FM)
- △ ライオンカトラ。ライオンかな。顔の形, 赤い所, 上をむいてぼえている。きこえてくる。(D, FM)
- ▽ 花がさいている。赤とオレンジの色, 春っぽい, 他の色は葉。(D, CF)
- ▽ 人が手をあげて立っている。手, マントがひるがえっている。(D, M)
- △ 貝。つつんしている所。(d, F)

1'34"

カード IX

- 10" ▽ 矛盾。形がないから。色がにじんでいるから。(W, Csym)
- ▽ ピカソの絵。全体の色の具合。(W, CF)
- ▽ ゆうれい。まん中のフワツとした所, にじんでいる形が人みたい, さみしそうに立っている。(d, M)
- ▽ 馬の顔。目と顔。(d, F)

1'31"

カード X

- 12" ▽ 人の顔。目, まゆ, 鼻, 口, おこった顔。(DS, M)
- ▽ かに。ギザギザした所, ハサミ。(D, F)
- △ 鹿が走っている。形, 足がこうなっているから走っている。(D, FM)
- △ ムクムクした羊。濃淡がムクムクした感じ, 羊の形。(D, Fc)
- △ フワフワした犬。形と濃淡。(D, Fc)

1'00"

反応決定因: M=7, FM=6, K=1, F=21, Fc=4, FC=1, CF=5, Csym=1。

M, FM が高く, $M > \sum C$, $CF > FC$ であるが M もある, Fc が数回あるなどから, 繊細さや敏感さを持ち, 生々とした情緒性があり, 豊かな想像力をもった人格特性であるといえよう。

Case B:

Aの場合と同様, 昨年集団ロールシャッハを経験しているが, 個人検査は今回が初めてである。普通のインストで, 10枚のカード全てに反応が生じた。

Total 反応数=48, 平均 R. T.=53", 平均 R₁. T.=6.1" であった。反応領域は W, D, d, S の全てにわ

たっていた。反応決定因は Case A と同様, さまざまであった。

カード I

- 4" △ 人, 牧師さん。頭は2つあるけど, ……手, 服, 天をあおいでいる。(D, M)
- △ ガ。全体として, 触角, 羽根, 模様。(W, F)
- △ 天使。向いあう2人, 頭と羽根でそうみえる。(D, F)
- ▽ 悪魔の顔。全体としてみて, これが耳で。(W, F)
- △ 悪物が登場する場面。点が散っている所がうごめいている感じ。(d, m)

0'50"

カード II

- 5" △ くま。黒い部分, 2匹が手を合わせている。(D, FM)
- △ 人。向いあって言い争っているよう。赤い所が頭で, 赤いから互いにおこっている。(W, M)
- ▽ うさぎ。赤い目, 耳の中が赤い, 赤いから。(W, CF)
- △ かえる。全体としてみて, はいつくばった感じ。(W, F)
- △ 道。空白の所, だんだん遠くへいく道。(S, FK)
- △ 人の体の中。下の赤い所と上の赤い所, 骨盤, 腸, 胃, うまくつながらないな。(D, F)

0'51"

カード III

- 3" △ 女の人。胸が出ているから女の人, 2人で火に手をかざしている。(W, M)
- △ 昆虫。耳, 口, 触角。(D, F)

0'40"

カード IV

- 5" △ 動物の毛皮。全体として, 色ムラから毛皮, 広がって敷かれているから敷物。(W, cF)
- △ かえる。全体の形, はいつくばった感じ。(W, F)
- △ 大木。夜, 影がうつっている。全体としてそびえたつ大木。(W, F)

0'42"

カード V

- 2" △ ちょう。触角, 羽根, 全体としてちょう。
(W, F)
- △ 牛。角, 前足, 後足, ぶつかり合っている。
(W, FM)
- ▽ 女の人。髪をなびかせているから。(D, m)
- △ 天使。羽根があるから, 2人よりそっている。(D, F)
- 0'48"

カード VI

- 8" △ 神さま。岩の上に立って, マントをひるがえしている, 正義の味方という感じだから神さま。(D, M)
- △ ねこ。頭, ひげ。(D, F)
- ▽ きつね。鼻づらがとんがっているから。ひげもある。(D, F)
- △ とら。部分と部分からだけど, ひげ, しま模様の胴。(D, F)
- 1'06"

カード VII

- 2" △ 女の子。髪, 鼻, 口, くびれた胴体, スカート。(D, F)
- △ 赤ちゃん。はいはいする赤ちゃん。手, 足, 頭が大きいから赤ちゃん。(D, M)
- △ うさぎ。耳と前足から。(D, F)
- △ 小犬。頭, 前足, しっぽ。(D, F)
- △ 鬼の顔。角があって, ひげがあるから。
(W, F)
- 0'53"

カード VIII

- 4" △ かに。赤いから, 形も。(D, CF)
- ▽ 花。赤い花, 緑の葉。(D, CF)
- ▽ カメレオン。形で生物, カラフルな感じからカメレオン。(D, FC)
- △ とら。下の黄色い濃淡がしま模様だから。
(D, cF)
- ▽ 湖。青い所と白い所。まわりの景色が写っている。青いから。(D, CF)
- △ 海の中。赤いさんご, 青い海草, 色があるから。(W, CF)
- 1'00"

カード IX

- 6" △ 海草。全体が, いろいろと色がある。
(W, CF)
- △ 馬。馬の顔。鼻と耳。(D, F)

- ▽ 象。耳と鼻。(D, F)
- ▽ 花。花の色, 葉の色, 茎。(D, CF)
- △ 洞くつ。真中の所, 色が黒くなっているから, 奥にすすんでいく感じ。(D, C'F)
- △ つり橋。下の方に川が流れているから。
(Ds, FK)
- 1'01"

カード X

- 4" △ 女の人。頭, 着物をきているみたい。
(D, F)
- ▽ 悪魔。目, まゆ, あけた口。(DS, F)
- ▽ かえる。茶色の所で手をのばした形。
(D, F)
- ▽ 男の人。体の割に頭が小さいから男の人, がけを登っている。(D, M)
- ▽ がけ。ギザギザしているから。(D, F)
- △ パイオリン。形。(DS, F)
- △ 海の中。全体として, いろいろな色があるから。(W, CF)
- 0'57"

反応決定因: $M=6, FM=2, m=2, FK=2, F=24, cF=2, C'F=1, FC=1, CF=8$ 。

Mが高い, しかし $M < \Sigma C$ である, CFが高い, mがあるなどから, 内的緊張に関係するが知的な人柄があり, 内的豊かさ, 子どもらしい生々とした情緒性をもつ。ただ ΣC の方が高いので, 外からの刺激に対しても反応する外向性があるといえよう。

Case A・B に共通してみられる傾向は, 子どもらしい生々とした情緒性と豊かな想像力をもつということである。前に生育史のところで述べた彼女らに共通する特長と, ロールシャッハ・テストの結果からみられる傾向とは, 完全に一致した。

Case C: (参考例)

反応領域はほとんど W, 反応決定因は陰影, 運動, 色彩, 形態などさまざまであるが, その説明はかなり主観的で, 断片的であった。「じっと見てみると, そうみえてくる, ……心に浮かんでくる……, 匂いがみえてくる」などがほとんどであった。反応内容から, T. K. は想像力が非常に豊かで, 内界の精神能力にあふれていることがわかった。反応を起こすプロットも特定できない彼の反応の仕方, 反応内容を目かくし分析でもするなら, 適応した職業人のなしたものとは否

定されるであろうと零石は言っている。

カード I

6' 八 こうもり

八 不安

八 夕暮

子どもが、こう、いて、林の中とか、まだ夕暮といっても、それほど暗くない。カラスのいるような杉林。地平線の灰色のような雨がきそうな感じ。電車の音が遠くのような感じ。いやな匂い、なにかこう、汽車の線路のような、なにか毛糸をやいているような匂い

八 貧しい、中流家庭のそれより下位の、下水のあるような汚いところ

八 お月さまがかきをかぶっているような感じ

八 なにか神経にさわるような音、風がない

八 なにかこう、ぼっかりした童話のような、明るさのない童話

4' 13-

(以下省略)

今回のロールシャッハ・テストの分析は、彼女らの人格特性の共通点を把握するため、主に反応決定因を手掛りとし、反応の仕方・反応内容の詳しい分析は行わなかった。これは別の機会にしたい。しかし、先に記述した Case A・B 各々のカードへの反応内容からも一部わかるが、彼女らは、刺激図を見るとそういう形に見えるというが、筆者には明確に把握できない反応もよくあり、これは、Case C と同様イメージ反応かもしれない。吟味段階で、筆者に説明するため、これが頭、これが足などと言っているが、中には、説明する彼女自身、反応に対する説明として不十分であることを認めている。

このような反応の仕方は、反応決定因：F として処理されているが、形態水準は不良である。この傾向は Case A・B・C 3 者に共通してみられた。このことも色聴反応をもつものに共通する特性なのであろうか。

2) MMPI

Case A:

L=3, F=17, K=13, データとして信頼性あり。

プロフィールコード：13'2746890-5

Case B:

L=3, F=13, K=14, データとして信頼性あり。

プロフィールコード：4'0782163-5

各々の人格特性を分析すると、どちらも問題ありであるが、今回の目的である 2 人に共通する特性をまとめると、神経過敏・うつ状態と情緒的認知と表出が比較的すぐれており、感受性が強いということである。また、社会的には引込み思案で、どちらかといえば空想に喜びを求める傾向もある。

Case A の T.Y. は最近結婚し、嫁ぎ先の家族との同居生活などから、精神面にかなり疲れている時のテストではあったが、暗示にかかりやすい傾向が強くていた。この特性と彼女の色聴反応の生起とは、全く関係がないのであろうか、気になる点である。

3) Y-G 検査

テストの結果を、D・C・I……S の順に、傾向の強く現われたものを記述すると次のようになる。

Case A:

抑うつ性大、攻撃的、ややのんき、思考的内向、やや支配性大、やや社会的外向。(AB 型)

Case B:

抑うつ性大、劣等感大、神経質、非協調的、攻撃的でない、非活動的、のんきでない、服従的、社会的内向。(E 型)

Case A・B に共通する点は抑うつ性大のみであった。先の MMPI にみられた共通点も、このうつ状態だけは一致したが、他は 2 人同時の一致はみられなかった。主観性や社会的内向の尺度は、高い傾向を示すかと予想したが、このテストからは明らかな結果は得られなかった。

ロールシャッハ・テストで得られた人格特性を、側面から支持するため、MMPI と Y-G 検査の結果に期待したが、2 つのテストから一致して現われた結果は、彼女らが心の中にいろいろ問題を持っていること、社会的に適応しにくいことを明らかにした。しかし豊かな想像力と強い感受性は、MMPI にどちらかといえば傾向ありと現われただけであった。

MMPI の結果と Y-G の結果がくい違ふという特性もみられるが、先の生育史のところでまとめた色聴所有者の人となりが、ロールシャッハ・テストと MMPI により、裏付けられたといえる。

今回分析された色聴反応を持つものとしての人とな

りとは、幼い頃に強く印象づけられた情緒の世界、それは子どもとして、現実が不安にみちた不快な世界であったとも推測できるが、空想の世界にとけ込み、安らぎを見い出していた体験が基盤となり形成されたものであった。しかも成人した今なお、現実社会からの逃避場所としての内的世界を持ち続けているのである。これは、子どもらしい生々とした情緒性・強い感受性・豊かな想像力をもつという人格特性として、とらえられた。

冒頭に過去の研究からの抜き書きを記述したが、その中にある色聴反応を示す人の特性と、今回得られた結果とは、読書能力や感性の鋭さという点で一致しているといえよう。

本研究で得られたこのような結果が、他の色聴所有者の人となりとも一致するか、今後も検討を続けたい。

要 約

1. 本研究は、前回の報告で発見された色聴反応を示すものの内、2人 (T.Y. と T.M.) に対し、色聴実験や面接・性格検査を実施し、色聴の現われ方や彼らに共通してみられる過去の経験、人格特性の分析を行なった。また、他の研究から得られた同様の結果とも比較検討し、色聴反応をもつものに共通する特色・人となりを明らかにすることを試みた。

2. 色聴の現われ方は、物音に対する反応と音楽に対する反応は存在したが、単音に対する反応は、今回の2人にはみられなかった。

3. 色聴は、いついかなる時でも、刺激さえあれば反応が生じるものではなかった。2人は、音楽の中に入り込まないと色聴反応は起こらないと言っている。雫石の被験者も同様であったが、内藤氏の場合は逆に

客観的に見極める態度が必要であるとしている。

4. 色聴の見え方は普通の視覚とは異なり、目を閉じて心の中を見ているような感じであるが、距離感や遠近感は普通にある。

5. 生育史や人格特性から、2人に共通する特色は、これは雫石の例にも言えることだが、幼い頃に強く印象づけられた情緒体験をもつこと、成人した今も現実から逃避する場所としての内的世界をもっていること、感受性が強く豊かな想像力をもつことなどであった。

6. 上のような特色が他の色聴所有者にも当てはまるか、また、今回把握できなかった別の特色が存在するか、今後も多くの実例にあたっていきたい。

引 用 文 献

- 1) 古矢千雪：音楽的知覚に関する研究 (V)——音楽刺激に対する共感覚的反応——，広島文化女子短期大学紀要，1983，第16号，pp. 61-66.
- 2) M. クリッチュリー & R. A. ヘンスン編（拓植秀臣，梅本堯夫，桜林 仁 監訳）：音楽と脳 I，サイエンス社，1983，pp. 295-317.
- 3) 雫石礼子：色聴に関する研究（その III），盛岡短期大学研究報告，1973，第24号，pp. 77-88.
- 4) 雫石礼子：色聴所有者のロールシャッハ・テスト，盛岡短期大学研究報告，1976，第27号，pp. 15-22.
- 5) 雫石礼子：色聴所有者のロールシャッハ・テスト反応（続報），盛岡短期大学研究報告，1978，第29号，pp. 13-20.
- 6) 内藤耕次郎：私の体験に於ける共感覚的現象の素描（上），実験心理学研究，1936，第3巻，第2号，pp. 113-125.

Summary

The purpose of this study is to analyze the phenomena of color hearing and the character of the color hearer, using their life histories and personality tests, Rorschach Test, MMPI and Y-G Test. The subjects were two women students from a women's junior college that were selected from the last study.

The main results were as follows:

- 1) They could perceive the phenomena of color hearing in short music and sound, but not in single tones.
- 2) They could not perceive the phenomena at any time, they reported, could only perceive the phenomena when they gave body and mind to the music. Mrs. Shizukuishi (1973) reported the same result, but Prof. Naito (1936) reported the opposite.
- 3) They reported that the experience of color hearing was something like looking in their minds with closed eyes, and there was the perception of distance and three-dimensional perception.
- 4) From the analysis of the tests and their life histories, common characteristics found in the two subjects were as follows: remembrance of emotional experiences impressed on them in childhood; having peace of mind in the mental world for escaping from actual society; and having sensitivity and a rich imagination.